

## 教育改革をめぐる本学学生教育意識について —21世紀の教育に向けて—

千 村 洋 一 朗

### はじめに

戦後の教育改革から52年を経、更に臨時教育審議会が「21世紀を展望しながら教育の現状を踏まえ、時代の発展に対応し得る教育の改革を推進するための基本的な考え方」にもとづき、教育改革に関する答申を公にして（1987年—最終—）以来13年を経た今日、いじめ、不登校、学級崩壊、学力低下、子どもの自殺さらには少年犯罪など教育（子ども）をめぐる問題が後を絶たない。新しい世紀を目前にひかえ、教育の目的・内容・方法・制度・政策など幅広い分野にわたる根本的な見直しが差し迫った重要な課題となっている。国政レベルにおいては、「教育改革国民会議」（首相の私的諮問機関）が平成12年3月27日設置され1年後を目標に提言を取りまとめるべく論議が行われている。また、民間レベルでも、教育問題に対する国民の関心は高まりをみせ、その改善、解決をめぐり、さまざまな資料や書籍が出版され、いまや教育改革は重要な国民的課題のひとつとなっている。

このような時期、将来の「女子体育及び児童教育の指導者」を目指して本学に入学した学生たちは、教育改革をどのように受け止め、どう考えているのか、授業（2000年度、教育原理）で行った「課題レポート」を通して学生たちの教育意識の一面を眺めてみたい。

### 「課題レポート」について

平成12年の衆議院議員総選挙に際し各政党をはじめ立候補者の多くは教育改革を主要な政策のひとつ

として掲げていた。朝日新聞社では、教育改革に関して「主要7政党」にアンケートを行い、その回答を6月19日付の朝刊に掲載した。アンケートの内容は「教育基本法を改正し、愛国心や道徳心の養成を明文化すべきだ」という議論について「賛否とその理由」を求めるものであった。回答では、この範囲を越えて、広く教育基本法一般にわたるものや教育改革についての見解などが含まれていた。そこで「課題」として、学生（体育学部3年生261名、児童教育学科1年生142名）に、7政党の回答の中から自分の考えに最も近い（共感する）ものを選んで、その理由を440字以内にまとめてもらった。なお、出題にあたって本課題は政治もしくは政党に対する意識に関するものではないので政党名はそれぞれAからG（党）にした。

7政党の回答のうち、教育基本法の「見直しに賛成」とするものはE、Fの2党、同じく改正（論）に反対するものはD、Gの2党でそれぞれの理由は次のとおりである。

E党＝今日の教育には、心を育てる人間教育が欠けている。教育基本法を見直し、家庭教育の充実や道徳教育の充実を図り日本人としての自覚と責任を持ち、国際的にも尊敬される青少年を育てる教育を進める。

F党＝教育基本法を見直し、日本人の伝統的な資質や文化をはぐくみ、「よき日本人」を育てる。現在市町村が行っている義務教育は国が責任を持って行うこととし、毎週の土曜日は家族で道徳や集団生活のルールを学ぶ日とする。

D党＝改正論は、森首相の「教育勅語」復活発言にみられるように、憲法への逆行とむすびついており反対。「個人の尊厳」「真理と平和を希求」「人格

の完成」など、現行基本法の精神を生かすことこそ重要。

G党＝教育基本法は、戦前への深い反省から制定された法律であり、愛国心、道徳心養成を明文化する改正には反対。「学級規模の20人化」など、子どもにやさしい学校教育現場をつくることを、教育改革で最優先する。

次に、A党、B党は直ちに教育基本法を取り上げるのではなく、教育問題や教育改革について幅広く議論していく中で教育基本法の見直しや改正について検討を行うべきというものである。

A党＝教育全般について様々な問題が生じている今日、教育のあるべき姿について根本的な議論を行う中で、教育基本法の見直しについても幅広く議論し、検討していくことが必要だ。

B党＝教育の諸問題を話し合い、改革案を提示する中で、教育基本法の改正が取り扱われるべきである。突出して「愛国心」や「道徳心」の養成をあげて改正を議論することは危険である。

C党＝「改正すべきか守るべきかは党内で検討中」であり、「教育基本法が非常に優れた基本法であることは間違いない」としながらも「一方で現状とそぐわないところがあることも事実。極端な右傾化を想起させる議論もある。慎重に議論を重ねて結論を出す」としている。

## 学生が選んだ「回答」

「どれも難しくて、とてもきれいな言葉であって、よく意味の分からない文でした。意味が分かるのもあったけれど、私にはきれいな言葉を並べて文章にしたようにしか見えなかったです。」と学生（体育）も述べているように「回答」は必ずしも分かりやすい文章ではなく、学生が内容を十分理解して選んだかどうかという問題もあるが、その結果は図1及び表1のとおりである。

学生がもっとも多く選んだ回答はE（45.4%）である。これを学部・学科別に見ると（表1）体育学部（以下体育）43.8%、児童教育学科（以下児教）はこれをやや上回り、48.6%となっている。

これは今までの学校生活における「勉強」「偏差値」重視の教育（心が育たない）に対する体験的な批判、さらに近年におけるいじめ、校内暴力、少年犯罪など“心”なき事件に対する率直な気持ちがEの「今日の教育には、心を育てる人間教育が欠けている。」という指摘に結びついたものと思われる。さらに、F（体育3.8%、児教7.0%）を加えると約半数の学生（50.4%）が、「教育基本法の見直しに「賛成」の回答に共感を示している。

これに対して、「教育基本法の改正には反対」とするDとGに共感する学生は体育、児教合わせて21.1%で、そのほとんどはG（体育19.5%、児教18.3%）となっている。

これも、同じく、今までの学校体験を振り返り、教師と生徒、生徒相互の信頼関係や人間関係の大切さを痛感しながらもその深まりが期待できなかった教育環境（諸条件）について、教育基本法の改正よりもまず「“学級規模の20人化”など、子どもたちにやさしい学校教育現場をつくることを教育改革で最優先する」Gに学生が共感したものと思われる。

教育基本法の改正については、広く教育改革（論）の中で取り扱うとするB、「教育のあるべき姿」について根本的な議論を行う中で、その見直しについても検討するというAについては、限られた時間の中で、文章表現が学生によく理解されなかったためか、いずれもほぼ6%にとどまっている。また、改正すべきかどうか検討中、というCは7.7%である。

A～Gのいずれにも共感し（でき）ない学生は全体で8.2%、体育では10.2%、児教では4.2%となっている。これらの学生の多くは教育（改革）に関心というのではなく、政治（党）や教育（改革）についてむしろ積極的な考えを持っており、これらの内容については、改めて後でふれる。

## 「教育基本法」について

教育基本法は本学の学生（には限らないかも知れないが）にとってなじみの少ない法律のひとつのようである。「教育原理」（教職必修）の受講生の中でも、今までに「全条文を読んだことのある」学生は、

例年きわめて少なく、せいぜい「名前を知っている」程度であれば良い方でほとんどが教育基本法とは初対面である。そのような事情もあり、前期に限られた時間内での学習の後で行った突然の課題レポートの出題に対して学生には若干の戸惑いがあったかも知れない。

教育基本法についてはほぼ半数の学生が「見直しに賛成」というEを選んでいるが、その理由を見る限り、内容を十分理解した上での考えではなく、次のレポートに見られるようにEの「今日の教育には心を育てる教育が欠けて」おり、「家庭教育の充実

や道德教育の充実を図る」という部分に学生の注目が集ったようである。

・「A～Cは抽象的で何を言おうとしているかが見えてこない。上辺だけで物を言っている感じがした。国は難しいことを言っているような感じがしてすごいかなっと一見思うが中身がやはり見えない。私の意見に一番近いのはEです。教育基本法を見直す必要は十分にあると思う。常に時代は変化しているのに法が変わらないのは変だと思う。日本の教育は、知識を詰め込む教育だけで心の教育というものはない。昔は、親と関わり、友

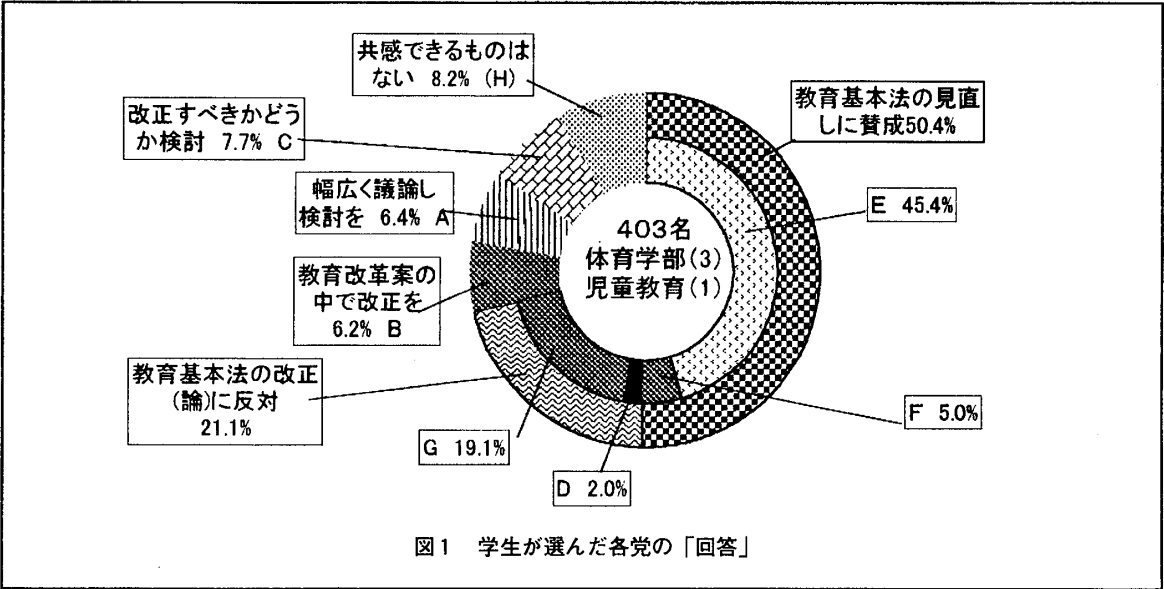


表1 学生が選んだ各党の「回答」(学部・学科別)

		政党	体育学部 (3年生)	児童教育学科 (1年生)	(計)
教育基本法の	「見直し」に賛成	E	114 (43.8)	69 (48.6)	183 名 (45.4) %
		F	10 (3.8)	10 (7.0)	20 (5.0)
		EF計	124 (47.6)	79 (55.6)	203 (50.4)
	「改正(論)」に反対	D	7 (2.7)	1 (0.9)	8 (2.0)
		G	51 (19.5)	26 (18.3)	77 (19.1)
		DG計	58 (22.2)	27 (19.2)	85 (21.1)
	教育改革案の中で改正も	B	18 (7.0)	7 (4.9)	25 (6.2)
幅広く議論し検討を	A	14 (5.4)	12 (8.4)	26 (6.4)	
改正すべきかどうか検討中	C	20 (7.6)	11 (7.7)	31 (7.7)	
「共感できるものはない」	(H)	27 (10.2)	6 (4.2)	33 (8.2)	
(計)			261 (100)	142 (100)	403 (100)

人、先生とも心で会話し、相手に入っていけたの  
だろうが今はそういうことは少ないのが現状である。  
それに対応した改正は速急に行う必要がある。  
もっと人との関わり合いを増やした教育を行って  
いくべきである。(例えば、共同作業を増やしたり、  
生徒同士で教え合ったりなど。)そしてFの  
日本の伝統的な資質や文化を知ることが、思いやり  
を育て、国際的にも尊敬されていくのではない  
だろうか。」(体育・E)

・「現在の青少年、特に10代後半の少年たちはい  
じめ、もっとひどくなると犯罪まで犯してしまう。  
それはやはり心を育てる人間教育が欠けているか  
らだと思う。勉強のほうばかり教育されても、心を  
育てていかななくては、人間としての自覚や自分  
自身の責任を取れなくなっているから、犯罪を犯  
してしまう。教育基本法を改正して、犯罪を犯す  
少年を減らすためにも、学校での道徳教育や家庭  
などで育てる家庭教育をもっと充実させたほうが  
いいと思う。これからの子どもたちにこのような  
犯罪や事件などを起こしてもらわないためにも、  
教育基本法を改正すべきだと思う。もっと住みや  
すい日本をつくって欲しいです。」(児教・E)

学生の多くは、ほぼこのような理由で「教育基本  
法の見直し」によって、家庭教育や道徳教育の充実  
を図り、「心を育てる人間教育」の実現(復活)を  
願いながらEを選んだものと思われる。なおその中  
には「教育基本法という法律を改正しただけで国民  
にどれ程の効果があるのだろうか、という疑問もある。  
学校教育現場に効果が現れるような教育改革を  
しなければ意味がないと思う」(体育・E)という  
ように、法律を改正するだけでは効果的な教育改革  
には必ずしもつながらないという指摘も少なくない。  
このような考え方は、共感するものがないとする  
学生にみられ、例えば次のようなものである。

・「教育基本法を改正したからといっていじめが  
なくなるとは限らないと思う。(中略)子ども、  
生徒を育てる親、先生の方などを改革すべき  
だと思う。」(体育・H)

・「法を改正しても何も変わらないと思う。政治家  
たちが表面だけ決めても意味がない。(中略)

もっと教育現場の人たちの専門家に任せることが  
大切だと思う。法を改正する前に大人の教育や学  
校に対する考えを改正していくべきではないだろ  
うか。」(体育・H)

・「教育基本法には問題なく、改正しなくてもよ  
いと思う。少年達の事件は教育基本法を改正して  
もなくならない。(中略)子どもというものは激  
変する社会に知らず知らず影響され、それに対応  
する力が弱いので圧迫感などを感じたりして事件  
を起こすのだと思う。子どもたちは自分でも何か  
分からないものを社会全体の中から感じているの  
だと思う。大人たちは教育基本法を改正するこ  
とを考える前に今の社会の状態を見直していくこ  
とを考えるべきである。」(体育・H)

いずれも、これからの教育改革には、法律の改正  
よりも子どもたちの教育に関わりをもつ大人たち一  
親・教師・国民一の意識の改革が必要であり、さら  
には、社会全体のあり方の見直しが先決であることを  
強調している。

それでは、次に教育基本法の改正(論)に反対と  
いう、G、Dに共感した学生の考えをみてみよう。  
G、Dを選んだ学生の理由は別して次の3つに分  
けることができよう。

まず第一は、教育基本法は戦前の国家中心の教育  
に対する反省から制定された法律であり、民主主義  
の原理を踏まえた「現在の教育基本法でもこれからの  
教育改革に十分対応できると思う。外面ばかり議  
論するのではなく、肝心な中身について議論すべき  
だ」(体育・G)さらには、「教育基本法の“個人の  
尊厳”“真理と平和”“人格の完成”は生かしていく  
べきだと思う。けれど、こういった法律があっても  
実際に実行されていないから変な事件が発生してし  
まうのだ。」(体育・D)など、形式的な議論ではな  
く、教育改革に結びつくような実質的な議論を求め  
るもの、一歩進めて“論”より実践の必要性を強調  
する考えである。

第二は、法律の改正よりも“学級の規模の20人化”  
など、学校教育の現場の学習条件の整備、改善こそ  
が“教育改革では最優先”という考えである。

第三には“愛国心、道徳心の養成”に関するもの

であり、これについては、項を改めたい。

ここでは、第二について少し例を取り上げてみよう。

・「私がGを選んだ理由で一番気にかかった（筆者注、注目したの意か）のは学級規模の20人化などを子どもにやさしい学校教育現場をつくることに努力すると書いてある部分でした。これは私も賛成です。すごく大切なことだと思いました。規模を少なくしていくことが子ども一人一人を良く見れて理解できることにつながってくるのだと思います。一人一人とふれあう時間が多くなればなるほど子どもの目線に立つことができ、今多くなっているいじめや不登校などの問題も減らすことが出来るのではないかと思います。これからの時代はどんどん子どもが減ってくるのでこの教育改革を考えて行くには良い時期だと思っています。

最後にもし今までにこのような方法で行われていれば、こんなにも青少年問題（万引きやいじめ、自殺）なども減っていたのでは…。もちろんこれだけの問題だけではなくそれぞれにいろいろな問題をかかえている子どもも数多くいると思います。とにかく子どもにやさしい学校現場をつくるのが大切だと思います。」（児教・G）

・「私はGに賛成します。学校の授業のあり方として良いのは、子ども自らが学習するという意欲を持ち、取り組む場所を確保することだと思う。現在の学校は大体40人学級だと思うがそんな中、先生一人で子どもたち全員を見てあげるというのは難しいと思う。表面上、その子どもを理解することが出来ても、内面を深く分かってあげるには人数が多くて難しい。そこで、学級規模を20人という少数にすることにより、先生一人一人の生徒と向き合う時間が取れると共に、勉強においても、子どもたちと先生との関係を密なものにする共に、子どもたちに何事をするにも意欲を持って行動できるよう指導できるようになると思う。

先生と生徒との間にいい関係（信頼関係）が生まれることで、子どもたちの生活行動が変わってくると思う。やはり自分のことを分かってくれる

先生にはいろいろ相談したいと思うからです。」

（体育・G）

・「A～Fまでの賛否論について、共感できる部分もあるが、どれも具体策が見えてこない。それと引き換えGは何をすべきか、そして、どのように進んでいくかなど、おおよそ見出すことが出来るように思う。例えば「学級規模の20人化」とあるが、これが、実際に学校現場で実現されれば、学級担任の視野も程よく行きわたり、生徒一人一人へ向ける目も強化され、担任と生徒が向きあえる時間も多くなり、より理解の幅が増えると思う。子どもたちにやさしい学校という響きが、なまぬるい感じて今ひとつひっかかるが、最優先されて行われるべきはこういうことからだと思った。

少年犯罪が増加の傾向をたどる今、教育改革に乗り出す各政党及び総理の気持ちも分からないではないが、こうひどくなる前にもっと早い対策を実行して欲しかった。日本の犯罪はアメリカでも起きた凶悪犯罪の何年後かに起きるといふ。もっと（将来を）予測した政治を行って欲しい。」

（体育・G）

・「Gの意見に同調したのは、子どもたちにやさしい学校現場をつくることを教育改革で最優先して欲しいと思うからです。法律が変わったところで学校現場ではそれほどの変化は得られないと思う。教育とは教師各々が個人の教育観に基づいて指導しているはずだし、何よりもその時々で子どもの成長に一番効果的だと思われる指導方法を選択しなくてはならないので、本当に子どものことを考えたら、法律の事などは考えていられないのではないだろうか。現場の教師や親が望んでいる教育改革と国会がしようとしている教育改革は次元が違っているように思います。現今の児童や生徒の状況（凶悪犯罪、不登校、いじめの増加）を考えなければ教育基本法改正についてもめ、足踏みしている場合ではないと、私は思います。本当に現場が望んでいることを深く考えて、良い意味で現場に反映できるような改革をして欲しいと思います。」（児教・G）

これらの学生が今求めている教育改革は、政治や

法律の「次元」における改革（論）ではなく、子ども＝親＝教師の良い関係（信頼）を深めることが出来るような現場の条件整備、改善であり、日々の子どもの教育（学習）の充実のための身近でより効果的な、早めの「教育」改革論であると言える。

## 「愛国心」と「道徳心」

「愛国心、道徳心を明文化する」教育基本法の改正に反対するD、Gに共感した学生は愛国心や道徳心についてどのように考えているのだろうか。ほかを選んだ学生も含め、ここでこれらを「語録」風にまとめ、さらにレポートを若干取り上げてみたい。

「愛国心、道徳心というものは生徒自ら培うものであって、教師が教えるものではないと思います。教師は愛国心や道徳心が生徒の心に芽生えるようにアドバイスをすればいいので今のままで十分だと考えています。」（体育・G）

「愛国心というものは教えるものではないと思います。この国で生まれて、この国で育ち、いろいろなことを学んでいく中で自らが感じるものだと思うのです。また道徳心というものも毎日生活の中で学ぶものであり、教え込んで出来るようなものではないと思います。」（体育・G）

「愛国心、道徳心はわざわざ（法律で）明文化しなくても人間一人一人の心の中から自然と生まれてくるものだ。」（体育・G）

「愛国心なんて、国や政治が良いと国民が、私たちのような若者が思えば、勝手に（筆者注 自然に）育っていくものだし、道徳心も同じように思います。わざわざ国を挙げて改正するものでもなく、養成などという言葉を使い育ててもらいものではないと思います。」（体育・G）

「愛国心は明文化する必要はないと思う。日本が私たちにとって住みやすく良い環境などだったら、教育されなくても愛国心は生まれてくるし、そういうものは教育されるものではないと思う。」（体育・G）

「そもそも愛国心や道徳心は、団体行動の中でいろいろ経験しているうちに自然に身につくもの

ではないでしょうか。義務的にそんな心押し付けると、それこそ戦争の二の舞だし、そんな教育は意味があるかという疑問が湧いてきます。」

（体育・G）

「愛国心については、以前の日本に比べて、その心はあまり重視されなくても良いのではないかなと思う。“愛国心”と聞いてイメージするのは、今の日本のような国民主権ではなく天皇主権を思い浮かべてしまう。」（体育・B）

「愛国心と聞くと私は戦争中にお国の為に命を落とすのは当然と言われていた頃の強制的なイメージを持っています。だから明文化してまで出すべきことではないと思うし、また道徳心に関しても授業で必ず学ぶべきもので個人が道徳的考えを持っていれば良いと思う。」（体育・G）

### <きめ細やかな検討を>

・「『愛国心』や『道徳心』のみを重視した改正は、望ましいものとは言いがたい。教育基本法は、教育を受ける権利をもった者がよりよい教育を受けるためにあると考えられるのがあたりまえで、このようなことへの改正なら見直し検討してもよいと思う。それに愛国心、道徳心とそう大げさに騒ぐことはないのではないだろうか。例えばオリンピックで日本選手が外国の選手に勝ち金メダルを獲得した時、大多数の日本人は喜ぶだろう。これは愛国心の現れではないだろうか。愛国心と呼べるものではないだろうか。道徳心については、法律に定められたから養成するということではなく、周りにいる大人がどれだけ家庭内や地域環境、もしくは学校で子どもたちに道徳的なことをもたせられるかによるのではないだろうか。

改正は必要ないということではなくもっと一つ一つを細かく見直し検討していくことが一番大切だと思う。」（体育・B）

### <“個人の尊厳”や“人格の完成”を>

・「最近の教育は確かに道徳心や愛国心が欠けていると感じますが、現在、少年犯罪やいじめなどが増えているのは、それだけではないと思います。

確かに道徳を今までより重点的にすることはとても大切なことだとは思いますが、私としては個人の尊厳や人格の完成などを重視すべきではないかと思っています。道徳などを学んで最終的にはそれが人格の完成につながることになると思うからです。また愛国心については、今さら挙げるものでもないと思います。自分の国を誇りに思うのはとても大事な事と思いますが、いろいろなものが国際化している時代に日本人として自覚や日本人らしくは、それほど重視することではないと思います。ただ今の基本法でも改正する面は多少あると思います。もっと子どもたち一人一人を大切にするような教育改革を行って欲しいです。愛国心や道徳心も大切ですが、私としては、それよりも教員の数を増やして、1クラスの人数を減らしたりして生徒一人一人に目が行き届くようにして欲しいです。」(体育・C)

#### <生徒と共に「考える」教育改革を>

・「私自身、教育改革についての知識はあまりないが、日の丸を揚げることにより『愛国心』が育まれ、週五日制を導入することにより『道徳心』が育成されるわけがないことは言うまでもない。私が教育現場に望むことは、なぜ今『愛国心』『道徳心』が必要とされているのかを、生徒自身が考えることであって、教育を進めようとする日本の上層部の方々がいくら声を大にして言っても、実際学ぶ側がしっかりと受け止めようとしなければ、ただ大人の社会の言い訳や意地の張り合いを子どもに押し付けているだけに過ぎない。そこで、日本の歴史を背景とした、教育についての考え方や日本(人)の諸外国の人との違い、戦前戦後の日本人のあり方などの事実をこれから子ども達に伝えることにより、押し付けではなく共に考える場として提供することによりこれから迎える国際化、情報化社会の中での本来の『愛国心』『道徳心』というものに子ども達自身が気づいていくのだと思う。」(体育・B)

#### <「明文化」について>

・「今の教育改革に求められていることは『愛国心』や『道徳心』の明文化ではないと思います。

教育勅語を行っていた戦前の教育は家族や地域との結びつきも強く、生徒たち自身が学校という場所で自分の為にまた国の為に学んでいたと思います。国の為にとは天皇の為のことで、このことから当時は愛国心・道徳心が身についていたと私はとらえています。その愛国心や道徳心が強い真面目な方々が戦争で大勢、犠牲になっているのに、正しい教育とは言い難いと思います。

今、必要なものは、生徒の精神的な部分を見られる人間らしい先生であったり、カウンセラーであったり、環境づくりだと考えています。大きな事件の犯人も、心の傷を誰かに気づいてもらいたかったと思うし、気がついてさえいれば、大きくならなかったと思います。」(児教・G)

「愛国心」「道徳心」というものは、それが育つに相応しい社会や教育諸条件＝「土壌」と「環境」の中で自然に生まれてくるもので、国や法律によって一方的に押し付けられるものではないのではないか、また、戦前の「教育勅語」を思わせるような「愛国心」「道徳心」の養成の明文化＝教育基本法の改正からは、さまざまな教育問題の解決に結びつくような効果は期待できないのではないか、学生達はこんな率直な疑問を抱いているようである。したがって「愛国心」や「道徳心」の養成をとくに取り上げる「教育改革論」には消極的否定的な立場をとるものが多く、学生の考えは、「教育」の改革にとって、より必要であり、もっと大切なことは何かという発想につながっていく。

以上、教育基本法の改正(見直し)と関連をもつ、いわば政治レベルの「教育改革論」に対する学生の考え(意見)を概観したが、ここで改めて学生はこれからの教育はどうあるべきか、そのためには何が必要と考えているか、いわば学生の描く「教育」改革についてまとめてみたい。

## 学生が考える「教育」の改革

### 一結びにかえて一

#### ＜心を育てる教育を＞

今回のレポートから見る限り、本学の学生がこれからの「教育」の改革でもっとも大切と考えていること、その一つは心を育てる教育の充実である。

「頭でっかち人間を育てるような受験戦争などで人間らしい心を育てることがおろそかになっていると思う。そういった道徳心を育てることで、やっていいことと悪いこと、また人の喜び悲しみといったものを分かっていかなければならない。それが人間らしい人格の形成につながっていくからだ。」

(児教・E)

「確かに今の教育には人間教育が欠けているのではないだろうか。テストで良い成績をとり、良い高校、良い大学に入り、そして良い会社に就職する。そういう考えが社会にある限り、今の状況は変わらないだろう。また、やはり一番問題なのは家庭教育ではないかと思う。これに関しては、いくら法律を改正しても個人がしっかりと意識をもたないと何も変わらないだろう。両親、そして教師達が子ども達一人一人に目を配ってあげることが大切だと思う。」

(体育・E)

「教師もそうですが、まず、一番子どもの側にいる親が、子どもをしっかり見なければいけないと思います。本当に自分の子どもがかわいいと、愛していると思うなら、いつも子どもの立場に自分を置いて行動し、いけないことはしっかりと叱り、良い事をしたら大いに誉める、そんな大人が増えればこんな犯罪などは起きるはずもないと思います。私も教師として親としても伸び伸びとした子どもを育てられるような立派な人間になりたいと思います。」

(児教・E)

「幼少の頃から親との密なコミュニケーションをとりお互いの信頼関係を確たるものにするならば凶悪犯罪を犯すようなことは絶対にないはずである。しかし、このようなことは法律で定めるようなものではない。もっと親が親としての自覚を持つべきで

ある。」(児教・H)

改善されつつあるとはいえ、今なお根強く残っている学歴社会の風潮の中で、「勉強」(知識)中心の教育によって、心の教育がおろそかになっている、これを改めていくためには、子どもの日常生活に直接関わりをもつ大人たちがその役割と責任を自覚し、着実に実践を重ねていくことがまず重要である、換言すれば心を育てる教育改革の担い手の中心は政治(家)や行政(官)ではなく、親であり教師であり、地域の大人たちー将来の「親」であり、「指導者」でもある自分達を含めてーである。学生の多くはこのように考えている。

#### ＜学校に「心の会話」を＞

「心を育てる教育」の場として学校(教育)が、今後その役割を十分果たしていくためには、何よりも教育(学習)環境の整備充実が大切である、とりわけ、学級規模の改善は、教育基本法の見直しよりも最優先すべき教育改革の課題である、Gを選んだ学生その他多くの学生はこう考える。

「学級としての人数は今は40人だと思うが、人も知識も詰め込め、詰め込めの教育はもはや意味を持たない。それよりも、“20人化”を採用し、一人一人に余裕を持って目を向けられる教師の立場や子ども自身も余裕をもって学べる環境を作ることを優先させてやるべきではないだろうか。」(体育・G)

「先日、ゼミで17歳の少年達のビデオを見ました。そこで、バス乗っ取り事件の少年が「存在感」が欲しいとインターネット中に書きつづっているのを見てやはり40人クラスになると先生も生徒も一人一人に目が届きわたっていないのだと思いました。今の教育現場では勉強でも運動でも個人差が大きく生徒たちにストレスなどが溜まってしまうのではないのでしょうか。これからクラスを20人程度のものにし、生徒一人一人の個性を大切に作りあげていくべきだと思います。」(体育・G)

「Gのような教育現場づくりをしていけば、少年事件を起こしているような子どもたちと1対1での会話の機会が増え、教師達が子どもたちの心の中が分かり、その上子どもたちも教師の心の中が分かり、



事件に発展する前にそれを食い止められるのではないかと思う。今の教育現場には少ない心の会話が多くなるような学校現場を作れる教育改革こそ今の日本には必要なのだと私は考えている。」(体育・G)

「心の会話が多くなるような学校現場作りを！」これは何年か前には高校生であり中学生であった学生たちが、自らの「学校体験」を振り返りながら21世紀に向けての「教育改革」に期待する素朴で熱い願いではないだろうか。さらに、続ける。

「実際の教育現場には人間性に優れ、道徳心が強く、何よりも生徒のことを考え、分かろうとしている教師がどれ程いるのでしょうか。また、教育現場にいる者の声がどれだけ教育改革に取り入れられているのでしょうか。私は疑問で仕方ありません。人格の完成を目的と言ったり、生徒の個性を尊重するといったことより、そのために、どのような教育をどう具体的にを行うと良いのか、その細かい状況に合わせた教育内容が必要であると思います。そういった内容が充実していないからこそ、現場にいる教師が生徒の悩みなどに気づいてやれず、また、いじめなどへの対応もうまくできずに、生徒を救ってやれないことが続いてしまっているような気がします。それは、現場の教師もそういった状況になれておらず初めて直面するためだと思うので、経験豊富な教師の声や生徒の声をもっと重視して子どものための教育内容を充実させるべきであると私は考えます。」

(体育・A)

学校が本当に“心を育てる教育の場”となるためには、単なる制度を改正するだけではなく、教師一人一人の「子どものための教育を充実する」日々の努力が大切であることを教師の卵でもある学生は決して忘れてはいない。

そして、これらの考えは、かつて、臨時教育審議会が最終答申で教育改革の視点のひとつとして掲げた「個性重視の原則」の中で子どもの「個性を伸ばし創造的で豊かな心を育てる上で」重要であると提言した「教育環境の人間化」であり、学生たちはその「積極的な推進」を今、心から望んでいる。

以上

## (付記)

本報告は、題目を「教育改革をめぐる本学学生教育意識について」としたが、本学学生の「教育意識」のすべてではないことは言うまでもない。

冒頭にも述べたように、本報告は、西暦2000年というこの年、有権者となった体育学部3年生と、間もなく有権者になろうとしている児童教育学科1年生計403名のレポートを通じて概観した学生の教育意識の一側面に過ぎない。

しかしこの内容は、本学における私の10年に近い教職体験とあわせてみても「本学学生の教育意識」として決して不自然ではない学生たちの生の声であり21世紀に向けての心の教育メッセージであると思う。

間もなく創立100周年を迎える本学のこれからの更なる充実発展のためにこの小報告が些かでもお役に立てば幸いである。

(2000.8.15)